

レファレンス講座 報告

「お帰りなさい、隊長！！いま南極はどうなっていますか？」

平成29年9月2日（土）午後2時から、レファレンス講座「お帰りなさい、隊長！！いま南極はどうなっていますか？～観測隊長が見た南極の世界～」を、ルミエール府中1階第1・2会議室にて開催しました。



<会場の様子>



<講師の本吉洋一先生>

講師には国立極地研究所教授の本吉洋一先生をお招きしました。先生には昨年10月29日にも講師を務めていただきました。その後まもなく、本吉先生は昨年11月から3月まで、第58次観測隊の隊長として南極観測に赴かれていました。これで先生が南極を訪れたのは11回目となります。前回の講座に参加された方から、ぜひその報告を聞きたいという声が多くあり今回の講座が実現しました。

今年は昭和基地開設60周年にあたります。お話はノルウェーの探検家アムンゼンの南極到達に始まり、今回本吉先生が参加された第58次観測隊にも及びました。

南極は地球の過去を沢山残しているだけでなく、隕石も見つけやすく太陽系の物質がどんなものかも知ることができるというお話でした。

南極大陸は日本の約37倍の広さです。地球で一番寒い場所で、その最低気温は -89.2°C を記録しています。また、南極の氷の厚さは約4700mもあり、それがすべて溶けたら60mぐらい水位が上がり、世界の大都市は水没することになります。その氷の内側は溶けていて中には湖があるそうです。これは厚い氷によって地球の中からの熱が逃げないためで、そこには微生物がいるのではないかとされているそうです。今回は海水が緩かったとお話がありました。度々南極を訪れているから実感されることかもしれません。

俗に越冬隊のことは「泊まり組」と、夏隊のことは「日帰り組」と呼ぶそうです。これは太陽が昇らない極夜と太陽が沈まない白夜を意味しています。そんな気候に調子を崩す隊員もいるそうですが、一番よいのは食事の時間を守ることだと先生は言います。



<氷が入った袋を手にする本吉先生>

途中、簡単な実験を行いました。コップに水を入れてその中に、南極から持ち帰った氷と冷凍庫の氷を入れ、違いを見ます。「気泡がある」、「パチパチと音がする」といった声が聞かれました。南極の氷には2万年から3万年前の空気が入っているということでした。



< 5 億年前の岩石 >



< 参加者のみなさん >



< コランダム (ルビー) >

当日、先生が南極から持ち帰られた隕石や岩石をお持ちいただきました。実際に手に取って見る事ができるため、休憩時には参加者のみなさんで人だかりができ、関心の高さを感じました。

氷を砕きながら進む砕氷船内から見た映像や、可愛いペンギンの親子の映像を見せていただきました。また、南極に関連したクイズも出題されました。

質疑応答では、様々な質問が出ました。昭和基地では野菜の水耕栽培を行っていて生野菜も食べられるそうです。現地のものを探ることは禁止されていますが、魚は捕釣ってもよいそうです。観測隊には医師も同行しています。過去には盲腸になってしまった隊員もいますが、とにかく気をつけることが大事とのこと。現地では基本的にはやる事が沢山あって暇な時間はないということでした。

実は、先生は海外出張から前日帰国されたばかりでした。インドネシアで講義もされたそうです。ご多忙中、豊富な知識と貴重な経験を基にしたお話をうかがい、普段なかなか目にする事の出来ない資料を多数お持ちいただき、充実した内容のレファレンス講座になりました。

協力：国立極地研究所